ヒジから爆発的な激痛が起こった。激感が神経を伝って脳へ伝達された瞬間、迅華の頭は痛みを打ち消し快楽として誤認させる脳内物質を大量に分泌させる。

強制的に官能にすり替えられた気絶せんばかりの痛みは少女の全身をあっという間に悦楽一色に塗りつぶしていった。

頭のてっぺんからスーツにつつまれた両の指先やハイテク足袋を装備した足のつま先にまで壮絶な悦感の炎が駆け巡り、体の中から少女忍の雌肉を甘く焼き焦がす。

まぶたの裏で痛みが起こす暗い業炎と快感がもたらす極彩色の火炎流が幾重にも交差した。

鏡が気まぐれに触手を動かすと糸の千切れた人形のようになった腕が人間の可動範囲を超えて曲がる。すると強烈で甘美な痺れがヒジで炸裂し、腕全体にとろけるような悦感のさざ波が何度も何度もわき起こる。

さらに鏡が指を動かすと絡みついた責め手が通気性と滑り止めを考慮され網状繊維で構成されたスーツの手袋部分へと移動する。ぴっちりと張り付いた戦闘服は少女くノ一の握れば折れてしまいそうなほどの五指の節々までもをくっきりと透けさせていた。そこに巻き付き、間髪入れずに指先から根元までコキ、コキ、コキとリズミカルに脱臼させていく。

「はぅううっっ！　はぁぁぁぁっっ、ぁぉっっっ!!」

そのたびに快感神経そのものを折り曲げられているかのような激しい悦感が節ごとに炸裂し、官能の電撃となって迅華の脳を突き刺した。

しっとりと濡れて艶めいた叫び声がノドから絞り出され、澄ました印象を与えるおちょぼ口は限界まで開かれて端から涎をだらしなく垂れ流す。

股間も同じだった。訓練で何度も使われているとはいってもまだまだ新鮮で綺麗な形を保った陰唇が充血を始めてふっくらと膨らみ、割れ目を作り始める。

すでに誤った脳内情報でキュンキュンと疼きまくっていた子宮の下でざわめく膣襞は盛んに愛液を作り始めており、スーツのおかげでまだかろうじてこぼれていないという有様だった。

「どう、マゾ雌に生まれ変わった気分は。最高の気分でしょ？　何をされても感じられるんだから、女としてこれ以上の幸せはないわよねぇ？」

といいながら紅潮して汗と涎、そして随喜の涙でべとべとになった迅華の顔を見下ろしてくる鏡。その顔には明らかに嘲笑の表情が浮かんでいた。

迅華は

「さ……さあ……、どうか……のぉ……。お主みたいな淫売くノ一ならともかく、儂は……あっ……ノーマル……じゃからな……」

と言い返すと、無理をして馬鹿にするように笑い返してやる。

（体を弄られたとて……心のいくさはまだ、終わってはおらんわ……）

たとえ恥辱にまみれようが五体不満足になろうが忍務は絶対。それだけが今の迅華を支えていた。

（自分の思い通りにならぬ相手ほど腹立たしいものよ……）

もしかすればそこにつけいる隙を見いだすことが出来るかも知れない。そうでなくとも殺されるまでの時間を稼ぐことが出来るかも知れない。

脳を弄られても忍者としての冷徹な判断力と精神力はまだむしばまれてはいない。案の定、迅華の予想外な台詞を聞いた鏡は笑顔をビキっと引きつらせた。

「さすが私が見込んだマゾ雌ちゃんねぇ……。もっと味わいたいのね？　なら、お望み通りにしてあげる」

態度には出さず、静かに氷のように嗜虐心を燃やしたボンテージのくノ一は十指をメチャクチャに動かした。迅華の全身に張り付いた触手が奇妙に連動し少女忍の関節という関節を圧迫しねじり上げ始めた。

かろうじて痛みか、あるいは快感に耐えようと握り拳を作っていた左手が無理矢理開かされ、右手同様に関節が外されていく。それも中手指節関節五本が全く同じタイミングでだ。

くきくきこきかきっくきっ!!

「うぐ……あああああああっっっっっんっっっっっっっ！」

ねじ曲げられた瞬間は鍛えられたくノ一の精神力でも意識が根こそぎ奪われそうなほどの苦痛を感じた。しかしそれはほんの一瞬だけ脳を刺激して痛みというプラスの感覚を与えてから、快感という全く逆方向のマイナスの感覚へと転化さ

れる。
　五指の根元から電撃が走り、腕を貫いた。
「んくぉおおおおーーーっっっっっ!!!」
　迅華の体が縛められながらも勝手に動き、頭をのけぞらせ無防備な真っ白いノドを晒して悦びを高らかに叫び上げる。
　快感電流は腕の中の神経を焼き尽くしてからくノ一の胴体へと流れ込み、小さな二つの胸の裏側に突き刺さった。そこでどす黒い快感が枝分かれを起こし乳房の中で快感の落雷が何度も起こった。誰にも触れられていない乳脂肪の中で快感神経そのものをつま弾かれるような悦楽が絞り出される。女の掌でも覆い隠せてしまいそうな乳房が忍者スーツ越しにもわかるほどに満々と張り詰め始めている。
　その頂点にある美しい薄紅色をした乳輪も胸の裏側から押し寄せてくる快感の波をため込むかのようにふっくらと膨らみ、先端のささやかな乳首も硬度を増して密着する布越しにその存在を主張し始めていた。
　痛いぐらいに硬くなった肉突起が着心地は最高のはずのスーツの裏地に擦れるたびに甘い痺れが乳先で弾け、気持ちいいスパークが小さな胸の中で炸裂する。
（ありえ……っ……ぬ……。こ、こんなこと、あり得ぬ、の……に……！）
　痛苦を快感と認識することを止められない。痛みは人間が危機を知るために持っている最も本能的な刺激だ。それが全て正反対の気持ちいいにされてしまっている。
（そ、そんなことになったら……儂はどうなってしまうのじゃ……？）
　常に痛みを伴う戦闘くノ一だからこそ感じる恐怖。しかし自己防衛という間違った大義名分を与えられ、全ての感覚を快感、悦楽、心地よさ、気持ちいいに変換し始めていた脳はその恐怖心すらも、
（もっと……もっと気持ちよくなってしまうのか……？　激痛の快感で殺されてしまうのか……？）
　ぞくぞくした被虐的陶酔にすり替えてしまう。
　それを証明するかのように疼きまくる子宮は熱く火照って下方へ通りきり、膣襞からにじみ出る雌の液体はすでにくノ一スーツでは防ぎきれないまでに量を増して本紫に染め上げられた股布からにじみだし、その両脇のやや薄い網状繊維部分からもドロリとこぼれだしていく。
　いけないマゾくノ一を叱るように――いや悦ばせるように両脚膝の関節を決めていた肉の拷問者が締め付けを増しながら蠢いた。
「ひっ……！」
　恐怖と妖しい期待が渦を巻き、脳内から媚薬にも似た麻薬が大量にあふれ出す。
　そして――。
　ゴギッ！　ゴギッ！
「んぁぉおおおおおおおおおおおぉぅうううううううううっっっっっっっっっっっっっ!!!」
　絶望的なまでの刺激が両の膝関節に襲いかかった。
　足がねじ切れる、と思った瞬間盛大な悦感爆発がわき起こり、両脚が燃え上がるような愉悦感に包まれた。甘美な灼熱の炎は『ル』の字に曲がった足のつま先まで焼き尽くし、跳ね返って少女忍のお腹の奥を壮絶な炎に包み込んだ。
　膣粘膜が快感で蕩けてしまいそうなほどに煮え上がり、子宮が女芯を溶かす超高温の溶鉱炉となった。
　鏡が指をひらめかせ、触手を動かすと脱臼した腕と指が無茶な方向に動き、両脚が壊れたおもちゃのようなダンスを踊る。途端目の前に桃色の霧がかかり、意識がショートした。
　スーツのレオタード部分と網状繊維に包まれた腰がびくんと大きく跳ね上がり、獣の交尾のような嬌声が迸る。
「んっ、んんんっっっ!!　んおおっっっ!!　おおおおっっっ、んぁおおおおおっっっっっ!!!」
　びちゅううっっ、びゅるっ、びゅるるるっ！
　布など無いかのように勢いよくクロッチを通り抜けて愛液が放たれる。
「おおおっっっおおおおうううっっおおおおおお……っおお……！」
　ガクンガクンと腰が飛び上がる度に突き出された股間から噴水のように二度三度と雌蜜が噴出し、布を突き抜けてアーチを描きながらびちゃりと粘った音を立

恥ずかしい割れ目に血液が流れ込み始め、ふっくらと膨らみ始めたのを感じずにはいられない。さらにはその奥の穴の温度がじわじわと上がり始め、くちゅりとイヤらしい水音が肉の中で響き渡った。

（やだっ……わたし……濡れて来ちゃってるう!?）

まだ外には漏れ出していないようだが、膣内では間違いなく愛液の分泌が始まっている。そのことを認識した矢梅は耳まで真っ赤にして恥じ入ってしまう。

（くそっ、くそぉっ……耐えなきゃ……我慢、しなきゃっ……！）

こんな事なら性拷問訓練をまともに受けておけば良かったと思うが、後の祭りである。

そんな少女忍の態度に効果有りとみたか、触手歯車は回転数を上げ始めた。分間一回転だった回転速度が二回転、三回転と徐々に早くなっていく。

締め付けもそのたびにキツくなり、今では矢梅の豊満な乳房に食い込んでくびり出すような形にすらなっていた。その状態で回転されると、生暖かい粘液にねっとり濡れた布地に強く擦過されそこから甘い熱が生まれ出す。

とどまるところを知らず一度も同じパターンでは襲ってこない繊毛にねぶられる度に擦過熱は上昇の一途をたどり、乳房の中に充満する。たっぷりと詰まった甘い熱を熟成させるかのようにきつく締め上げられて乳房を右に左にと揉みねじられると、それは悦感に変化して乳脂肪一杯に広がった。

それでもなお甘い悦感は送り込み続けられ、行き場所を無くした物は先端へと押し上げられ鮮やかなサーモンピンクの乳輪と乳首へと流れ込んでいった。時を追う毎に二つの肉の尖塔は硬く尖り始め、いつしかタイツ、チューブブラ、さらにはスーツに突き当たってきつく折り曲げられるほどにそそり立つ。

まさにそこに嵌められた淫の歯車がここぞとばかりに回転を開始した。

じゅりっじゅりっじゅりっ、じょりぃっ！

「ひ、ひっ!?　ひぅっ！　ひうっっ、ひううううんんんっっ!!」

数え切れない毛先が乳首を弾く度に痺れるような淫激が炸裂した。胸をこね回される緩慢な悦感では無く、まさに弾けるような強烈な刺激だ。

ぴんぴんと肉塔の表面を弾かれながら本体その物もねじられる度に乳頭で快感の小爆弾が破裂する。上半身がびくんと震え、ツインテールにまとめられた灰色の髪から甘酸っぱい汗がしぶきとなってキラキラと辺りに飛び散っていった。加速度的に息が荒く、湿っぽくなっていく。

（いやっ……気持ちいい……！　おっぱいきもちぃいよぉぉ……！　でもやだ、やだ、いやだぁぁぁっ！）

麻媚薬に犯され、心まで堕ちてしまった女性は二度と快楽の味を忘れられなくなりセックスと自慰と麻媚薬のことしか考えられない淫乱になってしまうという。

（いやっ、そんなの絶対いやっ！　しかも、しかもこいつなんかにそんなにされるのなんて絶対イヤだぁっ！）

ぐっと歯を食いしばった矢梅は

「ふうううぅぅっっっっっ……ふぅぅぅっっっっ……！」

必死に呼吸を整え胸の中で燃えさかり腰の奥で火がつき始めている官能の炎を何とか鎮火させようと試みる。

歯車からたれる粘液のしぶきを受けて艶めかしくつや光り始めた灰青のグローブに包まれた左手は掌に食い込むほどに握り拳を作り、右手は頑丈な銃把を何かにすがるかのように握り締める。

しかし気の流れや霊力をコントロールする丹田の辺りが下腹の中でも最もウズウズしているのが矢梅にとっては厄介きわまりなかった。いくら呼吸を整えようとしても、丹田の下辺りにある卵状の器官から発せられる甘い熱に散らされてしまい、集中できない。

（くそうっ……なんだ……てのよ……どうして……！）

いつも意識せずともやれていることが今日に限って、しかもこの大事なタイミングで出来ない。さらに悪いことに不勉強がたたって彼女は気づいていなかった。下丹田は精にも密接に関わり合っているのだ。気を下腹に意識すればするほど、女の精を司る子宮が燃え上がっていくのも当然のことだ。

額からわき上がる甘酸っぱいレモンのように香る汗はその量を一段と増やし、形よい頤を伝ってぽたぽたとしたたり落ちていく。

したたるのは汗のみでは無かった。今まではかろうじて穴の中にとどまってい

た愛液がとうとう限界を超え、外にこぼれ出し始める。漆黒の色をした申し訳程度のショートパンツに濃いシミを作り、内股をのタイツとくノ一スーツを濡らしながらしたたり落ちていく。

蒼の美少女くノ一が惑乱する様を絡みつくような視線で視姦していた電鬼がそれに気づいてしまったようだった。

スンスンスン、とわざとらしく鼻を鳴らし

「おやぁー？　なんかいやらしい匂いがしねぇかぁ？　んん？」

とイヤらしい笑みを浮かべて下半身から見上げてくる。

「そっ……そんなわけないでしょっ……、こんなヘンタイ道具でこの私が濡れるはずなんて……ないんだから……」

と言い返しながらも最後の方は消え入りそうなほどに小さな声になっていた。自分自身が一番よくわかっているのだ。膣肉が甘く疼き始め、妖しい蠕動を初めて愛液を沸き立たせていることを。

「ふん、あいかわらず強情っぱりな子猫ちゃんだぜ。ま、そういう所も可愛いんだけどな」

「可愛いゆーなっ！」

ムキになって否定するその姿は認めているような物だ。

「こいつを喰らえばもっと正直になれると思うぜえ？」

そういうと電鬼はコントロールパネルを三度タッチする。

――キュイィィ……キィィィィィン！

高周波音とともにすでにカチカチに勃起していたクリトリスに食い込んでいた二つの歯車が高速回転を始めた。

「!!!　んんぁおっっっっっっっっっっ!!!」

淫辱歯車の内側に仕込まれていた触手が猛烈な勢い快感神経の束が詰まった器官をブラッシングする。むき出しのクリトリスに対する責めは胸と違って最初から容赦なかった。

取り付けられた二個の歯車は右左それぞれ反対方向に秒間数百回の高速回転で容赦なく敏感肉突起を責め上げた。ぴっちりはまった鉄の輪にねじ切られそうなほどの強さでクリをひねられると、目を見開いて無条件でイクことしかできない。

「おっっっおっっ、おおおおーーーーっっ、おぁぁぁっっっ、おぁ、おぅぅぅぅんんんっっっっ!!!」

股間から恥ずかしい蜜が止めどなくあふれ出し、水鉄砲のようにびゅるびゅるとショートパンツを突き抜けてぶちまけられていく。

それに加えてただ硬いだけでも柔らかいだけでも無い、絶妙な硬度の繊毛がピンク色の肉真珠を粘液とともに磨き上げる。

表面にイボやコブ、そして粘液までもが沸き立つ歯車に擦られる感触はまるでざらざらした獣の舌数千枚に一斉にしゃぶられているかのような壮絶な擦過感を与えてくる。

そうされると灼熱としか言いようのない熱い愉悦が腰からわき起こって全身に広がった。だんだん頭の中が甘い熱に支配されてボウッとし始め、体中がフラフラしたり、急にびっくっと硬直したりを繰り返す。

さらに根元からもぎ取らんがばかりにキンキン突き刺さるような鋭い喜悦が秒間数百回と言う単位で産まれ、膣中に突き刺さり否応なしに矢梅の官能の肉畑を掘り起こした。腰が勝手に何度も何度も跳ね上がり、そのたびに勢いよく白濁蜜が放たれる。

（だめ……わたし……わたしもうだめぇぇぇっっっ……クリ……弾けちゃうっ……！）

くわっと見開かれて天を仰ぐ古紫色の瞳から随喜の涙が止めどなくあふれ出し、先ほどのまでの威勢の良さからはまるで想像も付かない色っぽい叫びを上げる。その口からは涎が決壊したダムのようにだらだらとこぼれだしていた。

「いい顔だぜぇ？　もっとこっち向けよ、いい感じで映ってるぜぇ」

電鬼の言葉を聞いた瞬間桃色に霞がかかってもうろうとしていた意識が一瞬で元に戻る。ハッと顔を上げると、目の前に据えられているデジカムのレンズと目が合った。おそらくは業務用で大型レンズにパラボラ型の集音マイクまで着いている。

それを認識した途端矢梅の顔が火を吹きそうなほどに真っ赤になった。